パウロに倣って

Ｉコリ１１：１

教会の中で「弟子造り」という言葉が叫ばれるようになって、もう随分たちます。多くの有能な牧師や伝道者たちが、自分の弟子を造ろうと頑張っています。使徒パウロも弟子造りに熱心でした。ただパウロの場合は、「自分がキリストに倣うものであるように、あなた方も私にならうものになってほしい」と言ったのであって、自分の弟子になりなさいというのとは、まったく意味が違います。自分がキリストに倣わず、金と物欲に捕らえられ、名誉と地位と権力に流れている牧師が、「私に倣うものになりなさい」と言ったとしても、私たちは絶対に倣おうとは思いません。私たちはキリストに倣った使徒パウロの信仰を学び、それに倣いたいと思います。

Ｉ．　パウロの信仰から外れない　　私たちはパウロの信仰から外れてはなりません。聖書に登場する人物の中で、パウロほどキリストの姿をに学び、その姿に倣おうとした者はありません。パウロの信仰の基盤となっている原則的な点を、今一度確認しておきましょう。

１．パウロは、聖書の言葉のすべてを、神の言葉と信じていました。
２．キリストの十字架による贖いの死と復活を信じていました。
３．神に信頼することによって救われると信じていました。
４．自分の内に宿り、お働きになる聖霊を信じていました。
５．キリストが再びおいでになると信じていました。
６．自分がキリストに似るものにされと信じていました。
７．万物の贖いを信じていました。

私たちはいま、混沌とした世界に住んでいます。神を見失い、権威を見失った人間は、自分勝手な道に迷い、滅びに進んでいるのです。
しばらく前に、ローマ・カトリック教会の教皇は、クリスチャンが同性愛者を差別してきたことを、悔い改めなければならないと語りました。自らを神の代弁者であると主張している教皇が、神を否定する人たちの考えと行動に同調してしまったのです。差別することはいけないのですが、同性愛者を差別してきたことを、悔い改めなければならないと言うことによって、同性愛を認容してしまったのです。私たちは泥棒を生業としている人たちでさえ、差別をしません。それは彼らの基本的人権をみとめ、彼ら人間として生きる権利を認めてあげることです。しかし、泥棒を生業とする行為は、ぜったいに認容いたしません。

こういう時代に住んでいる私たちだからこそ、何事においても、パウロと同じ信仰と世界観、人生観と価値観をもって生きることが、非常に大切なのです。私たちは、パウロの信仰に倣うものでありたいと、心の底から願っています。それがまた、キリストに倣うものとなるからです。私たちもまた、「わたしが

キリストに倣うものであるように、あなたがたも、私に倣うものとなってほしい」と言える人になりたいものですね。

Ⅱ. パウロの信仰に留まらない　私たちは絶対に、パウロの信仰から外れません。ただし、パウロの信仰に留まることもしません。ここが非常に大切です。パウロの信仰はパウロの時代を反映していました。いまは世界が変わってしまったのです。科学が発展し、社会状況が全く異なります。パウロの信仰に留まっていると、今の世界に対応できなくなります。パウロの信仰の原則をしっかりとわきまえ、それを堅持しながら、その原則の新しい対応、新しい適応をして行かなければならないのです。

パウロの時代にも医者がいて薬があり、簡単な手術も行われていました。しかし今の発達した医療に比べようもありません。パウロの時代には祈りによる癒しが切実でした。私たちは癒しの信仰を継承し、神は今も昔と変わりなく私たちを助け、必要な時には奇跡的な癒しも行ってくださると信じていますが、切実さの度合いと適用の仕方が、パウロの時代の人々とは違います。信仰の適用に変化が起こり、癒しについての考え方にも変化が起こるのは当然です。

パウロの時代と環境は、ユダヤ教を背景とした信仰でした。ユダヤ教の教えと信仰を前提としたキリスト教信仰です。パウロの信仰もまた、決定的にユダヤ教の、パリサイ派の信仰に基づいたキリストの理解、また、キリストの救いの理解でした。しかし今の私たちは、ユダや教の環境、あるいはユダヤ教の信仰の中には生きていません。そうではなく、日本という国の文化、現代日本の環境の中に生きています。教育も、訓練も、パウロが受けたものとは全く異なっています。私たちが普段関わっている人たちも、パウロが対応していた人たちとは、何から何まで異なっています。

パウロは確かに聖霊の導き、新しい啓示を受けて、キリストの教えの真髄を理解し、キリストがお建てになった信徒の共同体、すなわち教会のことを深く理解し、聖書に書き残しています。パウロの言っていることも、神の霊感を受けていますので。間違いはないのです。しかし、いま私たちが生きている時と場所、環境がまったく違うのです。パウロが書き残したものは、たしかに聖霊の啓示を受けて書かれたものですが、パウロの環境、育ち、教育がもたらした、パウロという人物によって、理解されたように書き残されたのです。ぱうろが異なった育ちをし、異なった文化に育ち、異なった教育を受けていたとしたら、同じ啓示を受けたとしても、異なった書き方をしていたはずです。

Ⅲ. 啓示と霊感の違いを理解する　聖書が神の霊感を受けた、誤りのない書物であるというのは、啓示ではなく、霊感という問題に関わります。普通、プロテスタントの神学では、この啓示と霊感の違いが曖昧なまま語られていて、誤解を生じてしまうのです。簡単に言うと、霊感は啓示を受けていてもいなくても、聖書を書き記したとき、神が正しく導いて下さり、誤りのないものにして下さる、神の特別なお働きです。聖書には神の啓示によらない記述が沢山あります。でもそれらは神の霊感を受けた、誤りのない書物なのです。

パウロが書き残した文書は、神の霊感を受けた誤りのない神の言葉です。しかしそれはまた、パウロの経験と教育という条件に狭められたものでもあるのです。彼の書き残した文書は、たとえ霊感を受けていたとしても、未発達なギリシヤ語という言葉で表現され、言葉としては非常に発達した、現代日本語の文化に生きる私たちには、とても不充分なのです。パウロだけを模範としていたのでは、時代と環境に対応できないのです。くりかえしますが、私たちが住んでいるのは 21 世紀の世界であり、ユダヤ教ではなく神道的な感覚の強い日本です。パウロが持っていた信仰理解とその適用では、追いつかないのです。パウロが持っていた信仰の原則をしっかりと理解し、それを頑固に保ちながら、日本という異邦人世界の現代に、柔軟に適用を変えていかなければなりません。いま私たちが必要としているのは、パウロの理解以上のもので、異邦人の中で、いかに正しい信仰を持って生きるかという問題です。

まるでパウロをこき下ろしているような言い方ですが、パウロはさすがに偉大な神学者で、深く考える人でした。彼自身はは意識していなかったもしれないのですが。あるとき、ユダヤ人の先祖でありながらユダヤ教徒ではなかった、アブラハムの信仰について語りました。パウロによると、アブラハムも信仰によって救われたのです。しかしそれはユダヤ教的な信仰ではなく、むしろ異邦人的な信仰でした。アブラハムの信仰は、キリストへの信仰ではなく、造り主への信仰でした。しかしその信仰で、アブラハムはキリストの救いを得たのです。

私たちは、使徒パウロが敷いた異邦人宣教の神学の土台の上に、異邦人宣教の神学の家を築いて、新しい方策と感覚で、異邦人である日本人に救いを伝えていくべきなのです。それは当然、キリスト教文化に生きる人々に対する伝道の仕方とは、異なっているべきです。

現代の日本人である私たちは、現代日本人としての信仰を持ち、現代日本人に対する伝道を進めて行きましょう。私たちの隣人が、私たちの同胞が、一人でも多く永遠の命を得ることができるように。造り主を見失った人間は、自分勝手な道に迷い、滅びに進んでいるのです。

そのような人たちが溢れている日本で、私たちはパウロのように、救いに至る信仰を　、わかりやすく、受け入れられやすく、本当に福音として聞かれるように、語り続けて行きましょう。